

ジンバブエで働いた1年間 — 人生の旅から



ヴィクトリアの滝

人文学研究科 欧米言語文化専攻 博士前期1年 曹 黄 個

ジンバブエといえば、何を思い浮かべるだろうか。アフリカの大自然の中で自由に生きる猛獣たちか、息をのむほど壮麗なヴィクトリア滝か、それとも「星の王子さま」に登場するバオバブの樹だろうか。そんな風景とともに、厳しい仕事の経験と異文化の衝突が私の心に刻まれている。

好奇心に駆られ、どこから湧いてきたのかわからない勇気を頼りに、20歳を過ぎた私は中国からジンバブエに向かった。2018年春から翌年春までのことである。この人生の旅は「仕事」が目的だった。ビザには「マネージャーアシスタント」というカッコいい肩書きが記されていたが、実際の業務は部品の調達、中国人社員の給料計算、会議の通訳など、多岐にわたっていた。新卒の私にとって、それは決して悪くない経験だが、長時間労働と過酷な環境により、入社して間もない頃から、精神的にも肉体的にもダメージを受けることになった。精神的なダメージの原因は、やはり新卒の私が厳しい労働環境に対応しきれなかったことだろう。肉体的なダメージの方も、月にわずか2日間の休日と一日12時間の労働、さら

にPM2.5濃度が55・5µg/m³を超える環境の中で働いていたのだから、当然だろう。まさに「ブラック企業」に入ったようなものだった。

1980年、ジンバブエはイギリスから独立する。独立前のジンバブエは「アフリカの穀倉 (Granary of Africa)」と言われていた。100年近くに及ぶ植民地支配の歴史は、イギリスの文化や行動様式をジンバブエ社会に深く浸透させた。そして近年、中国企業がジンバブエを含むアフリカ大陸に大量に進出している。

私が勤めた中国系企業は、従業員が300人以上いる中、中国人は管理職や技術者を含めて20人足らず。しかも12時間シフトで働くのだ。一方、現地の人々は労働法に基づいて8時間シフトで働く上、20分のティーブレイクもある。会社はコスト削減を優先して基本的な安全装置も整えないので、地元政府は労働者の安全を守るために、会社の管理層と月1回の定例会でよく衝突していた。ちなみに、こうした安全装置の不備は中国人にも適用された。よく見かけたのは、中国人技師が工場の天井を修理するとき、安全帯を装着せずにショベルカーのバケット部分に立って作業する姿



工場の鳥瞰図



仕事をサボってここへ

であった。こんな異文化交流の中で、私は多くの刺激を受け、それが現在の研究にもつながっていると信じている。

不幸中の幸いと言えるほど、その頃の仕事の経験が私の英語力を鍛えてくれた。そして、会社の

代表者の一人として、現地政府や労働組合とのやり取りを通じて、豊富な経験を積むことができた。さらに、この土地には未開発の部分が多く残されていたため、仕事をサボって自然の中でのんびり過ごす時間が全くなかったわけではない（笑）。

何かの縁かもしれないが、私たちの会社が当時取引していたタイヤの仕入先はヨコハマタイヤだった。そして今、こうして私は横浜でこの記事を書いている。